

初の大舞台、堂々と 宇賀神陸玖投手(3年)

野球人生で見たことのない光景だった。初めて上がった甲子園のマウンド。すぐ近くに大きな声援を送る観客の姿が広がっていた。

仲間が8点のリードを作った六回。今井投手からマウンドを託された。「みんなが甲子園で投げるチャンスをくれました」と謙虚に振り返ったが、マウンドさばきは堂々としたもの。強打の明德義塾に対して真っ向勝負を挑み、自己最速の138キロを記録した。「俺がしっかり守るから打たせろ!」。右翼の守備についての今井投手、投手も兼ねる一塁・入江選手の声が、背中を押してくれた。



七回には3連打を浴びて1死満塁のピンチ。ここでも度胸の良さを見せ、左打者の内角いっぱいを突くスライダーで見逃し三振。続く打者を左飛に仕留め、「最高に楽しく投げられました」。今井、入江の本格派右腕2人の陰で、コツコツ努力を重ねた技巧派左腕は「打たせて取って、守備のリズムを作りたい」との言葉通り、この日も四死球ゼロでテンポ良く試合を作った。

実は「作新で野球をやるなんて思ってもいなかった」という。県立高校が第1志望だったが、併願していた作新学院へ。練習試合では「何を投げても打たれ、野球が嫌になったこともあった」が、作新で学んだ「一球の重さ」に魅力を感じ、ひたむきに練習した。

「人一倍練習してきた今井がここまで投げられているのは、一緒に練習してきた自分にとっても誇り」。ベンチでも、マウンドでも今井投手を支え、優勝に貢献したい。

【萩原桂菜】

毎日新聞ニュースサイト

<http://mainichi.jp/koshien/articles/20160821/ddl/k09/050/002000c> より